

同窓会

ニュース・レター

第13号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2014年3月20日発行



耐震補強工事を終えた芸術研究棟（旧美学棟）

目次

文学研究科長・文学部長 ごあいさつ	P 2	退職される先生方からのメッセージ	P 6
同窓会総会のご報告	P 2	第5回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座のご案内	P 7
同窓会会長 ごあいさつ	P 3	平成25年度第2回就活サポート講座についてのご報告	P 7
記念講演会	P 3	第4回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座についてのご報告	P 7
懇親会	P 3	「教育ゆめ基金」のご報告	P 8
同窓生からのメッセージ	P 4～5	事務局便り	P 8

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

ごあいさつ

改革を迎える文学研究科・文学部

文学研究科長・文学部長 永田 靖

現在、国立大学は大きな改革の波にさらされており、教員のポスト削減、運営費交付金の毎年一・二％削減と重点的な配分への移行、国際競争力の向上、国立大学のミッション再定義、柔軟な人事制度導入など大学運営の根幹にかかわる重要な改革が待ったなしで迫ってきております。文学研究科・文学部としても安閑とはしていません。従来の学問伝統は維持しながらも、新しい改革に向けて適切に対応をしていかなければなりません。

平成二五年度にはこのような動きの中で大きな変化がありました。まず、今まで保留されていた教員のポスト留保計画が今後十年間に実施することが全学的に決定されました。私たちは平成二八年度から十年間で教授五ポストを准教授五ポストに切り下げ、同時に助教七ポストを留保する（つまり削減する）という結論に至りました。これは私たちで長い時間をかけて議論した結果で、この方法がもつとも現状への影響が少ないであろうという判断をしたものです。教授五ポストを准教授ポストに切り下げるのはそれほどの痛みではないにせよ、助教七ポストを削減されるというのは、私たちの研究教育にとって大きな変化となります。若い准教授の方々に一層の協力をお願いしているところです。

一方で、新しい力を与えられることも少なくありません。まず、美学棟の改修がついに完成し、名称も「芸術研究棟」と改称し、秋からは通常の活用を行っております。建物内は白色を強調し、清潔感に満ち、教室内の機器刷新経費も獲得でき、今後の研究教育の新しい場所となることが期待されます。

補助金関係でも、本年度から開始した文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」は、芸術ブロックの教員が多くかわって順調に実施され、次年度分申請も無事に採択されました。また考古学研究室が中心になって実施してきた「野中古墳出土品補修事業」も、研究科のみならず、本学と文化庁の補助を得て完成に近づき、現在は重要文化財指定に向けて準備中です。

また大阪大学未来基金と窓口統合を致しました「教育ゆめ基金」につきましては、今年度も文学部同窓会の皆様には多大なご支援を賜りました。「大阪大学創設一〇〇周年ゆめ募金」という類似した寄附基金がございますので、お間違えにならないようお願いしたいと存じますが、頂きましたお志は、本年度からは海外留学をする学生への経済的支援制度を構築いたしましたして、四名の学生への支援に活用をさせて頂きました。

同窓会総会

二〇一三年九月二日、大阪大学会館において、
大阪大学文学部・文学研究科同窓会の総会を開催しました。二〇一三年度
大阪大学文学部・文学研究科同窓会総会報告

二〇一三年九月二日

於大阪大学会館（旧イ号館）

1 会務報告

(1) 同窓会の目的
会員相互の親睦と文学研究科・文学部の教育・研究に対する支援

(2) 会の現状

卒業、修了生等の総数：約一万人
特別会員（元教員、現教員）の総数：約五〇〇人
卒業、修了生等のうち、住所判明者数
：約七二〇人

(3) 活動内容

①「同窓会ニューズレター」の発行（毎年三月発行。約一二〇〇人に郵送）

②「大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿」の刊行（五年ごと）

③同窓会講座の開催（同窓会の活性化を図り、二〇〇九年度より毎年五月に実施）：第一回「適塾とその周辺を訪ねる」（二〇〇九年）／第二回「阪大待兼山キャンパスの歴史をたどるー浪高・阪大現地見学ー」（二〇一〇年）／第三回「大」大阪モダン建築めぐり」（二〇一二年）／第四回「映画「オロ」上映会＋岩佐寿弥監督講演会」（二〇一三年、ただし、岩佐監督は会の直前に逝去されたので上映会と監督の追悼会となる）※二〇一一年は東日本大震災のため中止

④在学生の就職活動に対する支援

⑤「教育ゆめ基金」（文学研究科・文学部の奨学金寄附金）活動への協力

⑥同窓会役員と文学研究科長との懇談（不定期）

⑦他部局同窓会との連携 大阪大学同窓会連合会の構成団体として、他部局同窓会と連携。また、青雲会、法学部同窓会、経済学部同窓会、咲耶会（大阪外大、阪大外国学部同窓会）とともに、毎年阪大文系同窓会役員懇親会を開

催し、交流と情報交換を行っている。

(4) 会の運営

毎年二回（おおむね六月と十二月）、文学研究科で幹事会を開催し、活動計画などを検討。年度一回目の幹事会では、前年度の会計決算を審議し、承認している。

(5) その他

二〇一一年は大阪大学創立八〇周年であったため、五月三日の阪大ホームカミングデーに合わせ、「同窓会&レクチャーコンサート」（大阪大学二一世紀懷徳堂と共催）と、総会・懇親会を企画した。しかし三月に東日本大震災があり、「華美な行事は自粛」という大学の方針に従って中止した。

2 大阪大学同窓会連合会についての報告

①本会は、各部局の同窓会の発展に寄与するとともに、部局同窓会相互の交流、連携を推進することにより、大阪大学の卒業生等の交流、親睦を図り、併せて大阪大学との連絡を緊密にし、広く社会に貢献することを目的とする。

②二〇〇五年（平成十七）七月二五日設立。会員数五二九名（平成二五年三月末現在）。

③会員向けサービス

同窓会連合会ホームページでの会員専用ポータルサイト、広報紙「大阪大学ニューズレター」の送付、各種の大学イベント（ホームカミングデー・東京開催「大阪大学の集い」など）の案内、会員特典の実施（ホテル阪急エキスポパーク・千里阪急ホテル・大阪大学中之島センターのレストラン割引、東急ホテルズ宿泊料金割引、大阪新歌舞伎座特別割引など）。

④入会方法と会費

ホームページからWebで入会手続きをする。正会員の入会資格は、部局同窓会の会員であること。終身会費は一五、〇〇〇円。なお、この会費の三割は部局同窓会へ還元される。

⑤文学部・文学研究科同窓会としては、会員に同窓会連合会への加入を勧めている。

来るべき大きな大学改革の時代を迎えて、文学研究科・文学部ではこれを絶好の機会と捉え、私たちの研究教育を一層発展させるべく努力をしてまいりたいと考えております。今後とも皆様のご協力を賜りたく存じます。

ごあいさつ

同窓会総会のご報告

同窓会会長 河上 誓作

大阪大学文学部・文学研究科同窓会は、昨年九月二二日、五年に一度の同窓会総会を開催いたしました。今回は文学部創立六十五周年にあたり、午前の講演会には、長州藩と横村正直研究の第一人者である布引敏雄先生（大阪観光大学名誉教授、文学博士、阪大文・国史一九六五年卒）をお招きし、「会津藩と長州藩—NHK『八重の桜』の周辺—」と題してお話いただきました。大河ドラマで話題になったこともあり、会場の文学部会議室は満員の会員でにぎわいました。

午後の総会は、会場を大阪大学会館（旧イ号館）アセンブリホールに移し、会長と永田靖文学研究科長の挨拶のあと、村田路人事務局長から会務報告があり、ニューズレター・名簿の発行、同窓会講座の開催、在学生の就活支援、「教育ゆめ基金」への協力、他部局同窓会との連携、会計報告など、過去五年間にわたる活動内容が報告され、了承されました。続く懇親会は立食形式で行われ、ゲストとしてご出席くださった法学部同窓会「星雲会」会長・野村史郎様、外国語学部同窓会「咲耶会」副会長・大木勇様はじめ、たくさんの方々のスピーチと上質のワインで盛り上がり、後半は、片岡リサ様（箏曲家、大阪音楽大学講師、阪大院・音楽学博士課程在学）による見事な琴の演奏を楽しみ、盛会のうちに全日程を終了いたしました。

次回総会は五年後の二〇一八年で、文学部創立七〇周年にあたります。会員の皆様には、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



河上 誓作（かわかみ・せいさく）
阪大文学部卒。文学博士（大阪大学）。阪大助手、九大助教授、阪大教授、阪大文学研究科長を経て、2004年阪大名誉教授。2004年神戸女子大学教授、2005年同学長、2012年同名誉教授。専門は英語学。編著書『認知言語学の基礎』他。1996—2000年日本英語学会会長。



永田 靖
1957年生まれ。専門は演劇史演劇学。上智大学外国語学部ロシア語学科卒、明治大学大学院演劇学専攻博士課程単位取得。1998年より本学勤務。IFTR国際演劇学会理事、日本演劇学会理事。最近の共著に *Adapting Chekhov*, Routledge, *The Local meets the Global in Performance*, Cambridge など。

記念講演会

講演を終えて

布引 敏雄

NHK大河ドラマの与える影響はきわめて大きい。全国の大学日本史教員が束になっても敵わない。だから批判しなくちゃならん、と私は考えている。

最終回の『八重の桜』は、まるでタネ明しのように製作者側の意図を見せていた。会津藩が朝敵かどうか。孝明天皇の御宸翰があったかどうか。このことがドラマでは熱意をこめて展開されていた。

だが、私はそのことにさほど関心はない。私が関心を寄せるのは、明治維新という大激動によって社会がどのように変ったか、また、その激動の中で人間一人ひとりがどのように悪戦苦闘したかである。残念ながらNHK『八重の桜』と私の関心とは少しズレていたようだ。

今年は『軍師官兵衛』。その番宣を見て驚いた。曰く「乱世を終らせた男」。

総会に先立ち、布引敏雄先生による講演会を開催しました。

冗談じゃない。戦国時代を黒田官兵衛が「終らせ」なんて、思いもよらない。歴史における個人の役割を軽視するつもりはないが、NHK大河ドラマは英雄主義の度が過ぎる。

ところで講演の際に私が最も驚いたのは、数年前下級生の女性が「あなたが講演をするということなので」と長野県からわざわざ参加して下さったことである。五十年ぶりの再会というわけだが、こんな余慶に出くわすというのも同窓会ならではの、うれしい限りである。



略歴
1968年、大学院国史専攻修士課程修了。山口県文書館に勤務、のち高校教員に転じ、1985年から大阪明浄女子短期大学（のち大阪明浄大学と改称）勤務。2009年、同大学退職。大阪明浄大学名誉教授。文学博士（大阪大学・1991年）。著書『横村正直—その長州藩時代』（文理閣・2011年刊）など。

懇親会

総会後の懇親会では、和やかな歓談の時間を過ごしました。また、文学研究科音楽学研究室に在学の片岡リサさんには、お琴にベルカント唱法の声楽を合わせた素晴らしい演奏を聴かせていただきました。



文学部紹介ビデオの上映

同窓生からのメッセージ

今回は、同窓会総会懇親会でご挨拶をいただいた皆さまからメッセージを寄せていただきました。

最近の思ひつら

杉本 憲司

幼稚園から始まって、大学退職まで、約七〇年間、黒板を正面にしたり、背中をむけたりして過して来た。また最近、背中にすることが、年間に数日ある。この間に、世の中は黒板からパソコン使用による（私はほとんど使用できませんが）画面を使うことになって来た。しかし、話し方はマイクを使用する機会が増えたが、話すことには変りない。この際に今まで多くの人々に話しが理解されていたのかと反省している。文系の話しは、話すことによる伝達が重要になる。私のように「物」と「文字」による研究をしていると、「物」を画面で見せながら、しかし言葉による説明が必要である。「文字」も史料・資料をみながら読み上げることが多々ある。そのため、昔ながらの話し方による説明することになる。この際、問題は聞きての方とのコミュニケーションのあり方にかかってくる。聞いてくれる人の年齢、問題意識の濃淡、関係する問題についての知識などについて考慮しなければならない。これらのことができていたか気になる。特に最近感ずることは



略歴

1954年東洋史学卒業。61年文学研究科博士後期課程退学。大阪大学助手、大阪府立大学教授などを経て、89年佛教大学教授。2007年佛教大学名誉教授。中国古史・中国考古学専攻。

「ゆとり教育」の影響かなにか知らないが、一部の若者の知識なさにとまどってしまう。今、ある種の辞典編集に少ししかかわっているが、その際、私たちの考えで字句の解説をする。しかし、この時、辞典を買ってくれる若者に理解されるかどうかを考慮せざるをえない。最後に、この頃一番気になるのは、自分自身のこと。後期高齢者の仲間にはいると、世間並みに老人ぽけになって来た。目は悪くなり、字がはつきりと見えなくなる。耳は遠くなり、他人の話しを充分聞きとることができない。記憶力が落ちてきて、物忘れが多くなり、文字をど忘れすることは常時のこと。体調は今のところなんとか保っているの、後、何年このような状態が続いていくのかを念じながら、散歩位の運動で日々を過している。以上が老人の最近思っていることを書いてみた。

経験したことを
ボランティアで生かしたい

大西 愛

卒業以来、歴史資料を扱う仕事に携わってきました。一九八五年に大阪府公文書館設立、職員となりました。アーカイブは世界では当たり前にある機関です。「実際にこの目で見たい」と外国に出かけました。今では日本のアーカイブ文化のレベルは、「結構ええとこまで来ている」と実感しています。

六十歳を過ぎてからは、これまでの経験をボランティアに生かしたいと思うようになりました。そして、

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が保存しているベトナム難民の資料に出会いました。ベトナム戦争によって国から逃れたボートピープルが香港に到着し、難民申請して認定されたり、認定されなくて留まったりという、それらの人の行方がわかる資料です。この資料箱がジュネーブの本部に送られて、書庫にあったのです。書類はバインダーに入ったり、箱にバラバラに入れてあったり、内容もリストとは合わなかったりとなかなか手間です。書類を新たな中性紙のフォルダに入れてタイトルを鉛筆で書き、アーカイブボックスという専用箱に入れ、リストをコンピュータに入力します。UNHCR職員の指示の下に日本人のボランティア数人だけで作業は進めました。二〇〇九年から二〇一三年まで毎年夏の二週間をジュネーブで過ごしました。シニアで始めたボランティアでしたが、そのうち現役の人も学生も興味を持って参加してくれました。ウィークエンドには教会でコンサートを聴いたり、モンブランを見に行ったりしました。

二〇一三年十一月に岩手県釜石市に行きました。二〇一一年三月の津波で書庫が水に浸かり、役所の書類や市町村合併前後の歴史的に重要な文書も被災しました。この二年余り、いくつかの大変な作業を経て、カビないようくっつかないように注意して水濡れが乾かされています。阪神淡路大震災の時も多くのボランティアが資料救済にかかりました。私は資料目録作りならできると伊丹市立博物館に通いました。ベトナム難民資料の整理はまだ終わっていませんが、遅くて



略歴

1965年、史学科卒。伊丹市史編集室、のち伊丹市立博物館勤務。ベルギー・ブリュッセル日本人学校教員、大阪大学五十年史資料編集室、大阪府公文書館専門職員を経て大阪大学出版会勤務。著書に『アーカイブ事典』（共編著、大阪大学出版会、2003年）など。

も数年で私たちの手は離れます。しかし、東日本の被災資料整理は先が見えていません。これから何年も資料修復・整理が続けられます。それにはボランティアも関わっていくことが望まれています。

文学部時代に教わった事

川原 研一

私は昭和四十六年に大阪大学文学部社会学講座に進みました。社会学講座には四人の教授、助教授の先生が

いらっしゃいましたが、特に甲田和衛教授のゼミ（外書講読）が印象に残っております。これが厳しくて、教養時代に勉強してこなかった私などは、非常に苦勞を

しました。初回のゼミで、甲田先生の厳しい質問に説明者が立ち往生するのを見て、これはえらい所に入ったと戦々恐々となりました。苦虫を噛み潰したような表情の甲田先生の顔は、当時は恐怖でしたが、今は先生の

心中が察せられ、思い出すとつい苦笑してしまいます。甲田先生は「君たちに、社会に出てすぐ役立つような事を教えるつもりはない」と話されました。「そんな殺生な」とも思いましたが、社会学を知識として教えるのではなく、問題の立て方、目的、方法論の厳密さと将に学問の仕方を教えようとされていました。その時に学んだ事は、確かにすぐには役立ちませんでしたが、長期のスパンで考えると、確かな「教え」でした。ある時、人類学の著名な先生が何かの勲章を受け



略歴

昭和48年、哲学科社会学専攻卒業。同年(株)電通リサーチ入社。需要予測、顧客満足度指標作成等を伴う市場調査業務に従事。平成19年執行役員。同22年退職。

れ、「私は○○を達成した」というコメントが新聞に載った事があります。この時に甲田先生は「何かを達成したというより、目指すべきはこういう事で、力及ばず何なにがまだ分からない、と私は言いたい」という趣旨の事をおっしゃいました。心に引っ掛かり、折につけその言葉について考えるようになりました。ビジネスの世界こそ、○○を成し遂げた！という言葉は日常茶飯事で出てきます。当然ながらその人の理想のレベルが反映されてしまう訳で、志をいかに高く持つか、そしてその志で行為をいかに律するかが大事なのだ、と考えるようになっていました。

私は電通リサーチという市場調査の会社に入り、四〇年たちます。市場調査では、市場実態に照らした納得性が厳しく要求されます。会社人生もほぼ終了ですが、何とかここまで来れたのも、甲田先生や他の先生方の授業で鍛えられたお陰です。大阪大学文学部には深い所で世話になったと思っています。ありがとうございます。

大阪大学文学部日本学科日本語教育学講座の一期生として

中西 久実子

私は一九九〇年に文学部日本学科日本語教育学講座を卒業しました。入学当初は英文学科に進んで英語教師になることを目指していたのですが、二年生のとき日本語学科が新設されたのでした。日本語科の授業は少し聞いてみると、すぐにその魅力にひきこまるほど新鮮なものでした。最初に興味をひかれたのは、活用でした。国文法では「読まない・読みます・読む・読むとき・読めば・読め」のような活用を丸暗記しますが、日本語教育では、まずマス形「読みます」を導入し、それから、テ形「読んで」の作り方を教えます。なぜ「読んで」が「読みて」ではいけないのかという

ルールも教えます。普段は何気なく使っている「読んで」が、かくも美しいルールを持っているとは、と驚かされました。こうして私は日本学科の一期生として学部を卒業、その後、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程まで修了し、一九九七年に慶應義塾大学に専任教員として着任しました。

慶應義塾大学での主な仕事は、日本語を外国人留学生に教えることでした。日本語を教えると言うと、「英語を媒介にして」と思われがちですが、そうではありません。初級でも媒介語を使わずに日本語だけで教えました。最初のうちは身ぶりを使って教えることさえあり、苦勞の連続でした。しかし、まったく日本語が話せない学生たちが、約三〇〇時間ほど学習すれば、初級レベルまで話すようになってくれたので、達成感が得られました。

慶應義塾大学では、毎年最低でも一二〇名の留学生に日本語を教えていましたので、六年間で総計七〇〇名以上の教え子たちが世界にはばたいて行った計算になるでしょうか。全員ではありませんが、彼らとは今も何らかの形で交流があり、これは私の宝です。

現在は京都外国語大学日本語学科で、主に日本人学生に言語学や日本語教授法などを教えています。京都外国語大学から巣立った日本語教師たちが、私と同じように世界のどこかで人と人の輪をつないでいってくれていることを嬉しく思っています。大阪大学の先生方に教えていただいたことをこれからも教え子たちに伝えていきたいと思っています。



略歴

1990年、日本学科卒。慶應義塾大学国際センター専任講師、京都外国語大学外国語学部日本語学科准教授などを経て、現在、京都外国語大学教授。主な著書に、『現代日本語のとりたて助詞と習得』（ひつじ書房、2012年）など。

退職される先生方からのメッセーヂ

◆退職にあたって

武田 佐知子

皆様、短い間でしたがお世話になりました。私の母は大阪の天神橋筋の生まれ、私も父の勤務の関係で、小学校時代を西宮市仁川の、イチゴ畑を見下ろしながら、川でザリガニ捕りの出来るのどかな環境で過ごしました。しかしまさか三〇年にも及ぶ永い年月を、大阪と東京を往き来する生活になろうとは、思ってもみませんでした。母の血のせい、大阪が大好きで、東京から戻って来て、タクシীর運転手さんの大阪弁を聞いただけで、帰って来たことが実感でき、ホッとしたのです。三〇代からの四半世紀を大阪外国語大学で過ごしましたが、今にして思えばそれこそ学生との、また同僚達との、何度もの大学改革の波に揉まれながら、徹夜しながらみんなでプロジェクトのプランを練った、涙も笑いもありの「遅い青春」とも言うべき日々だったかもしれません。

そして阪大との統合です。文学研究科に移籍したメンバーより遅れること二年、二〇〇九年に実質的に仲間に入れて戴きました。が、あつという間の四年半でした。外大に就職したばかりの頃、定年間の先生が、少しお酒を召しあがって「私は天寿をまっとうできたけど、君の頃にはどうなるかわからんよ」とおっしゃったことがありました。「国立大学が無くなるなんて、そんなことがあるはずがない」、私はそう思っ



略歴

早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了。東京都立大学大学院人文科学研究所史学専攻博士課程修了。大阪外国語大学助教授・教授を経て、大阪大学理事・副学長。大阪大学文学研究科教授。主な著書：『古代国家の形成と衣服制一袴と貫頭衣-』、『信仰の王権聖徳太子-太子像をよみとく』、『衣服で読み直す日本史』、『娘が語る母の昭和』、『古代の衣服と交通-装う王権-つなぐ道-』、『古代から架かる虹-時と装いのフーガー-』

◆大阪外国語大学・大阪大学
退職に当たって

市川 明

二〇〇七年一〇月、大阪大学と大阪外国語大学が統合し、それを機に外国語学部（ドイツ語専攻）から文学研究科に移籍した。もともと以前から文学研究科・文学部の非常勤講師（ドイツ文学、演劇学）として出講していたし、外大でもドイツ文学・演劇の演習を長年にわたってやってきたので、違和感はなかった。ただ当初はまさしく二重国籍状況で、二つのキャンパスを忙しく行き来しなければならなかった。豊中では新設のアート・メディア論コース、ならびに演劇学の学生・院生のために演習と論文指導をし、さらに外国語学部でも私のもとで卒論を書く学生がいたので、退職まで箕面に通い続けた。

私はどちらかというとのんびり型で、最初から移籍を望んでいたわけではなかった。良き先輩、友人・仲間である林正則（ドイツ文学）、永田靖（演劇学）両氏がお声をかけてくださらなければ箕面にとどまっていたかもしれない。でも移籍してすばらしい同僚や学生に恵まれ、本当に豊中に来てよかったと思っている。ともすれば狭い領域にとどまりがちだった私のドイツ演劇研究も大きな広がりや厚みを示し始め、充実した年月を過ごすことができた。この場を借りてお礼申し上げたい。

豊中（こうした言い方は移籍組の特有の表現かもしれないが）では連続して三つの科研プロジェクトを進めることが出来た。「プレヒトと音楽」「プレヒトとベルリナー・アンサンブル」「演出家としてのプレヒト」である。三つ目は継続中なので引き続き阪大のお世話になる。現在はドイツ・アメリカ、日本をライヴとオンライン・ストリーミングでつなぐ『谷行／イエスマン』上演に取り組んでおり、二月五日からは阪大の学生を連れてドイツ公演に出かける。どうやら忙し



市川 明

1948年大阪府豊中市生まれ。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語専攻卒業。同修士課程修了。プレヒトやハイナリー・ミュラーを中心にドイツ現代演劇を研究している。多くのドイツ演劇を翻訳し、関西で上演しているほか、NHKドイツ語講座の講師として、本年も「アンコールまいにちドイツ語」を担当している。近著に『プレヒト 音楽と舞台』（花伝社）、『Verfremdungen (Römbach Verlag)』などがある。

◆イ号館にいた頃

中岡 成文

一九八七年四月に当時の教養部に哲学担当教員として着任した。哲学では大峯顕先生、倫理学では故溝口安平さんがおられた。

与えられた個人研究室は、いま大会館と呼ばれているイ号館の最上階、屋上に出る扉の傍らにあった。大峯先生は三階、溝口さんは四階におられた。大峯先生のところで、目の覚めるほどおいしい玉露をご馳走になったことをふと思出す。溝口さんを中心とした初期ハイデガーの研究会が始まったのも、イ号館においてだった。

「哲学」という授業を、火曜日一限、土曜日一限と二限に提供した（当時は土曜日にも講義があった）。それが教員としての私の仕事のすべてだったと言つてよい。対象は、すべて理系の学生たちだったと記憶する。多少でも科学に近い主題のほうが彼らになじみがあるだろうと、ルーマンの社会システム論を勉強し、（既訳がひどかったので）ドイツ語から自分で訳してまとめたものを講義資料とした。同じルーマンでも、使ったテキストは三つの授業ですべて異なる。まだワープロ専用機を使っていた。

何年かたつて、イ号館の二階にかなり広い研究室を与えられた。そのころには、授業で科学論・科学哲学を教えるようになっていた。教養部がなくなり、文学部に分属したのは一九九四年のことであるが、それに先立つしばらくは新しい組織（独立研究科）の構想が模索された。

一九九五年の阪神淡路大震災のときは、イ号館を出て新棟

二階に居住していた。この退職の辞もその窓から竹藪を見ながら綴っている。

米ネブラスカ大学のキム教授（日本哲学研究者）と



中岡成文（なかおか・なりふみ）

1950年山口県岩国市生まれ。京都大学大学院文学研究科を単位習得退学したあと、福岡女子大学文学部を経て大阪大学教養部に着任。のち文学部に移り、コミュニケーションデザイン・センターの初代センター長を務める。

第5回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座のご案内



能楽体験講座

大阪を拠点に活動する若手能楽師・井戸良祐氏の解説を聞きながら、実際に能の上演の際に使われる能衣裳、能面を見せていただき、能舞台の上で能の謡や所作、囃子の演奏を体験します。

- 日 時 2014年5月10日(土) 14:00~16:00
※地下鉄谷町線 文の里駅改札口 13:45集合
- 場 所 井戸能舞台(阿倍野区文の里)
- 講 師 井戸良祐(観世流シテ方)、囃子方一名
- 参加費 2000円
- お申し込み方法

氏名、卒業(修了)年次、専攻を明記の上、メールまたは葉書で下記連絡先までお申し込みください。
締め切りは4月25日(金)です。

メール: dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所: 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学文学部・文学研究科同窓会宛

講師略歴

井戸良祐 (いど・りょうすけ)

観世流シテ方役者。東京藝術大学卒業。スイス、クロアチア、ロシア、ブルガリア、スロバキア公演に参加。
座・WAKAZO 主催。

第4回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座についてのご報告

平成二五年五月十一日(土)に、第四回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座「映画『オロ』」上映会・土佐寿弥監督講演会を開催し、四三名の方が参加されました。

まず映画「オロ」を参加者で鑑賞しました。チベット人の少年オロに密着したドキュメンタリーは感動的だと好評でした。

引き続き、当初映画監督の岩佐寿弥氏による講演を予定していましたが、岩佐氏が平成二五年五月四日に急逝されたため、岩佐氏と生前交流のあった参加者にスピーチをお願いし、岩佐氏とその映画について参加者で語り合いました。

オロの望郷の念、そして故人との縁に思いをはせ、今回の講座も充実したものとなりました。



平成二五年度第二回就活サポート講座についてのご報告

平成二五年八月一日(木)に、文学部(担当教育支援室)と本会の共催による平成二五年度大阪大学文学部第二回就活サポート講座「働くって何だろう——就活開始以前の文学部生のみなさんへ」が豊中総合学館にて行われました。

この講座では主に学部二、三年次生を対象として、学生が今後就職活動をする上で、また将来社会人として働く上でどのような点に留意して大学生活を送るべきか、神村昌志氏(株式会社アイ・アム&インターワークス代表取締役会長、本学文学部英米文学専修卒)と野村文子氏(有有限会社メディアライティング取締役、本学キャリアアドバイザー)のお二方にお話しいただきました。

学生とのやりとりを交えながらのご講演で、学生はこれからの学生生活や就職活動について意欲を沸き立たせられていたようでした。

今後とも本会では、文学部の就活支援活動に積極的に協力していく予定です。皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

同封の
「教育ゆめ基金」
案内を
ご覧ください

文学部創立60周年（平成20年）の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。昨秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、平成25年度総計190万円ほどのご寄附をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（文学研究科長 永田靖）

平成25年度「教育ゆめ基金」寄付者リスト

荒牧 典俊	大澤 慶子	木曾 明子	坂川 佳子	中原 計	藤木 真	山戸 暁子
栗根 功雄	大野篤一郎	北泊謙太郎	里見 軍之	中村 加津	星野 佳織	吉田 高重
栗屋美知代	大村 睦子	木村 純雄	佐野 智子	中村 元保	牧野 好男	吉田 優子
石原 実	大森 紀子	グッドリフ みゆき	島崎 裕子	西田 諭司	松下 まさ	若山 映子
岩倉 國浩	岡田 千賀	國原まち子	志水紀代子	西村 公江	松田 陽子	
植田 和文	柿田 衛	小谷晋一郎	杉本 欣哉	垣生 満恵	三橋 浩	
上田 雅康	門林理恵子	小林 正人	武田 恒夫	藤井 安子	三代 啓子	
瓜生 彩子	上山 泰	斎藤芙美子	長岡まゆら	藤岡 穰	山上義太郎	

（敬称略・五十音順）



◆「教育ゆめ基金」の支出（平成25年度）

・文学部海外留学支援制度奨学金（4名分）：480,000円
（平成25年度1月末現在の残額：5,184,534円）

事務局便り

お知らせ

◇『文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿』（二〇二二年版）について

二〇二二年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。販価（五千円）＋送料（百六十円）でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、新規に同窓会終身会費（二万円）をお支払いいただいた方のうち、希望される方に「冊呈呈」しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。

ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金（□二千元）を受け付けております。今年度もおかげさまで多くの同窓生の方からご支援をいただいております。ご寄付をいただいた皆様のご芳名につきましては、次号で掲載する予定です。

【名簿代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

□座番号 009401179043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

●お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆事務局メンバー

事務局長 村田 路人（S五二卒）
総務 岡田 禎之（S六二卒）、高木 千恵（H一〇卒）
企画 計 西田有利子
企画 画 市 大樹（H七卒）、中尾 薫（H一五修）
広報 報 岡田 裕成（S六一卒）、舟場 保之（S六一卒）
事務局補佐 福村 一弥（H二五卒）
事務局補佐（ウェブ担当） 鈴木 寛和（H二六卒）

●住所 〒560-0802 豊中市待兼山町二番五号

●ホームページ <http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

●事務局メールアドレス dousoukai@let.osaka-u.ac.jp